

松江市鹿島町の“手結のスランプ褶曲”



図1 手結のスランプ褶曲

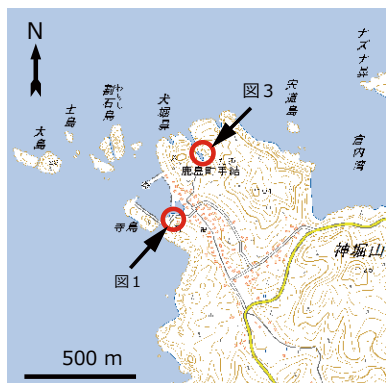


図2 位置図 (国土地理院電子国土 web)



図3 鼻ぐり灘

松江市鹿島町手結地域には、中新統の成相寺層が広く分布しています。この地域の成相寺層は、流紋岩質の火山礫凝灰岩や凝灰質礫岩・砂岩が優占し、しばしば黒色頁岩層を挟んでいます。ここで紹介するスランプ褶曲は、灰白色の凝灰質礫岩・粗粒砂岩層のなかのレンズ状となった黒色頁岩層にみられ、層理の特徴を保ち滑動変形した極めて特徴的な形状を呈しています(図1)。

スランプ褶曲は、手結港から寺島へ向かう海岸道路を5分ほど歩いた左側の崖にみられます(図2)。レンズ状岩体の大きさは、幅5.4m、最大層厚1.7mで、これを挟む地層は級化層を示す重力流堆積物です。岩体と接する上位の地層は30cm大の角礫を伴った典型的な水中土石流(debris flow)からできています。

スランプ褶曲を示す頁岩層は、約20cmの単層が肥大化や薄層化することなく一様な厚さを保ち、連続して回旋状に褶曲している特徴があります。しかし、レンズ岩

体中央の頂部付近では褶曲構造の凸部が削り取られ、翼部が南30度の傾斜で岩体下部(図1のハンマーのところ)まで延びています。このことから、このスランプ褶曲は南側(図1右側)の頁岩層が北側へ変形しながら滑動していく途中で、上位の土石流の封圧によって下方へ押し込められたために、引き続き下部から滑動変形をしたものと考えられます。“手結のスランプ褶曲”は、このように元の地層の形状を残しながら変形したコヒーレント褶曲を示す貴重な例といえます。

手結は手結浦^{たえのうら}として風土記時代から知られています。『雲陽誌』には「津上明神」のなかで「社の西に岩穴あり。土人穴塩といふ。高さ七尺横三尺入十五間あり、此所にて諸人潮を汲、不浄を掃ひ清めるため穴に通う」と記述されています。また、半島の北には粗粒玄武岩が円形に侵食されてできた「鼻ぐり灘」(図3)もあり、自然と歴史が融合した所といえます。(野村律夫*)

* 島根半島・宍道湖中海(国引き)ジオパーク推進室